

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：空の青さを知る人よ

今回のテーマ

きょうだいトラウマとエディップスコンプレックス

はじめに

「空の青さを知る人よ」は、両親の突然の死という喪失体験に伴い、年の離れた姉妹であるあおいとあかねの関係が、本来の姉妹関係から親子関係（保護者と被保護者）へと変容していく物語である。この過程で生じた姉妹間の情緒的葛藤は抑圧されたまま、あおいは成長を続ける。

あおいが、高校2年生となり成人への移行期を迎えた中で、長年抑圧されてきた情緒的葛藤が再浮上する。この変化の過程で生じる心理的葛藤、特にあおいの内面に芽生えるあかねへの競争心、劣等感、そして罪悪感は、まさにきょうだいトラウマの典型的な症状として理解することができる。そこにあかねの元恋人である慎之介が帰郷し、今まで置き去りにしてきた様々な感情と向き合うことになる。

今回、きょうだいトラウマとエディップスコンプレックスという概念を通して本作品で描かれている、きょうだい関係の複雑さと、そこに生じる喪失からの離脱・再建の過程について考察していきたい。

今回のテーマ

I. きょうだいトラウマの理論

II. あおいの発達過程における退行と再挑戦

III. 「しんの」の象徴的意味とエディップスコンプレックス

IV. 慎之介の喪失と都市での挫折

V. 三者それぞれの「再生」の物語

VI. まとめと「井の中の蛙」の多層的解釈

I. きょうだいトラウマの理論的背景

1) ジュリエット・ミッセルの「きょうだいトラウマ」

ジュリエット・ミッセルの「きょうだいトラウマ」は、きょうだい関係に固有の心理的構

造を明らかにした概念である。その中核には三つの特徴がある。第一に、きょうだいは「同じ家族の一員」でありながら「異なる個体」という同等性と差異の矛盾を内包し、この矛盾が根本的な不安定さを生む。第二に、心理的に「消去される」「愛情を失う」という排除の恐怖が存在する。これは物理的な死ではなく、関係性における存在価値の否定への深い不安である。第三に、愛する対象との競争という矛盾した感情の共存である。

ミッケルはこの理解のため「母の法」概念を提唱した。ラカンの「父の法」が父-子の垂直的関係における言語と象徴秩序への参入を表すのに対し、「母の法」はより原初的な禁止を含む。新しいきょうだいが生まれると、幼い子どもは排除の恐怖から殺意を抱くが、母はこれを禁止する。この禁止が「母の法」の核心であり、限られた母の愛情を分かち合う水平的な社会関係の基盤となる。

「母の法」には明確な階層や言語化された規則はなく、共存と妥協、嫉妬と連帶が混在する言語化以前の次元である。きょうだいトラウマは、こうした水平的関係における平等と差異の葛藤から生じ、垂直的なエディップス的関係とは異なる心理的課題を提示している。

きょうだいトラウマが最も顕著に生じるのは、2歳から4歳頃の幼児期といわれる。

ミッケルの枠組みで整理すると：

時期	従来の理解	ミッケルの理解	臨床的意味
生後 6-8 ヶ月	口唇期	妄想-分裂/抑うつポジション	母子関係
2歳前後	肛門期	きょうだいトラウマ	母の法、水平軸
4-5 歳	エディップス期	エディップス期	父の法、垂直軸

アニメでの幼い時のあおいは4歳であり、きょうだいトラウマの要素（あかねへの羨望や競争心）が存在していたと考えられる。

また、きょうだいトラウマは一度だけ起きるものではなく、各発達段階（児童期、思春期、青年期）で異なる形で再活性化する可能性がある。特に青年期（とりわけ15歳から18歳）

には、アイデンティティ形成と絡んで再び顕在化することがある。

そしてこの物語は、両親の死によって抑圧されてきたきょうだいトラウマが、あおいの自立・独立を契機に再び湧き起こり、その情緒的課題を巡って展開される物語である。

2) 「空の青さを知る人よ」姉妹関係の変遷と心理的相克

本作の姉妹関係は、両親の死を境に劇的な変容を遂げている。幼少期のあおいは、慎之介のバンド加入を夢見ることで、姉・あかねとの「エディップス的三角関係」において独自の居場所を確保しようとした。しかし、両親の死により慎之介は去り、姉妹は「保護者と被保護者」という密接な二者関係へと追い込まれる。あかねが自己を犠牲にして「完璧な母性」を体現したことは、あおいの生存を支えた一方で、彼女に強烈な劣等感と罪悪感を植え付ける結果となった。

高校生となり、かつての姉と同年齢に達したあおいは、抑圧していた葛藤を再燃させていく。完璧な姉と比較されることで生じる「対等な女性としての敗北感」や、姉の人生を縛っているという罪悪感は、いつか愛情を失い排除されるのではないかという「殺される恐怖（心理的消去への不安）」へと繋がっている。あおいが抱く東京への執着や秩父への閉塞感は、こうした内面的な自己否定や不安から逃れるための「躁的防衛」の側面が強い。つまり、彼女の上京志望は単なる夢ではなく、自己の存在価値を懸けた必死の心理的逃走といえる。

II. あおいの発達過程における退行と再挑戦

両親の突然の喪失により、あおいは姉のあかねと擬似的な親子関係へと変容した。それに伴い、エディップス葛藤は一時的に棚上げされた。

この過程で、慎之介という理想的な男性像への感情や、あかねへの対抗意識・嫉妬心は、抑圧・否認されたものと考えられる。一方で、あおいは親に甘えるように退行的な態度をとることで抑圧された感情の一部を表現し、音楽への情熱という形で昇華したが、内面に蓄積され続けた。

高校卒業が近づくにつれ、あおいはあかねと「同じ大人の女性」として比較される立場を意識するようになる。完璧なあかねと未熟な自分を比較し、さらにあかねの人生設計を壊したという罪悪感も抱えていた。感謝と競争心、自立への憧れと依存の安心感という相反する

感情に葛藤し、これらから逃れるように上京への逃避願望を強めていた。

そのような中、町おこしのバックバンドとして金室慎之介が現れる。かつてのキラキラした青年ではなく、物憂げでジレンマを抱えた大人の男性になった慎之介の姿に、あおいとあかねは失望にも似た複雑な感情を抱く。同時に、高校生の姿をした生き靈ともいべき「しんの」があおいの練習する御堂に姿を現すのである。

III. 「しんの」の象徴的意味と三角関係の再構築

1) 「しんの」の心理学的機能

前回生き靈として現れた「しんの」と、あおい、正嗣とのやりとりを取り上げた。

若き日の慎之介「しんの」の出現は、あおいにとって重要な心理学的意義を持っている。

まず、「しんの」は父親的存在の復活を意味している。彼はあおいが幼い頃に心理的に排除せざるを得なかった憧れの対象であり、長年抑圧されてきた父親への愛情が再び表面化する契機となった。同時に、あおいにとっては自立と成長に向き合う象徴的存在でもある。

精神分析的な三角関係の構造（エディップスコンプレックス）で考えると：

- **しんの**：父的存在（憧れの対象、競争の対象）
- **あかね**：母的存在（愛情と保護の源泉、同時に競争相手）
- **あおい**：子どもの存在（エディップス葛藤を体験する主体）

なぜなら「しんの」は、あおいが長年回避してきたエディップス葛藤の核心部分を体現しており、眞の心理的成熟を遂げるために避けて通れない課題そのものだからである。

また、「しんの」はあおいにとって安全な挑戦の場を提供している。現実の大になつた慎之介ではなく、過去から現れた「安全な」存在であるからこそ、あおいは心理的リスクを抑えながら感情を探求することができる。これは、一度は回避したエディップス葛藤への再挑戦の機会を与えてくれるものもある。

さらに、「しんの」への感情は、あおいが「保護される妹」から「大人の女性として愛する対象を持つ」という新たな発達段階への移行を象徴している。この感情を受け入れ、向き合ふことで、あおいはこれまで抑圧してきたあかねへの競争心、嫉妬心、愛情といった複雑

な感情（つまりコンプレックス）を認め、より統合された存在へと成長していく。そして重要なのは、「しんの」を媒介としてすることで、あかねとの関係を維持しながらこの成長過程を経験できることである。

2) 三角関係の再構築

「しんの」の出現により、一時的に健全な三角関係が復活することとなる。この三角関係の再構築は、それぞれの登場人物に重要な心理的変化をもたらした。

まず、あおいにとって「しんの」への恋心は、単なる過去への憧れではなく、現在の慎之介への思いでもあった。あおいは「しんの」に告白することで、これまで抑圧してきた慎之介への感情を表現し、競争者としての自分を受け入れ始めた。しかし同時に、この告白は逆説的にあかねと慎之介の関係を促進する意味も持っていた。あおいが「しんの」への思いを通じて過去と向き合うことで、現在のあかねと慎之介が共に歩むべき道を明確にしたのである。

あかねにとっても慎之介の帰郷は、これまでの保護者としての立場から、一人の女性としての立場へと移行する契機となった。13年前の思い出と現在の慎之介との再会を通じて、あかねは自分もまた恋愛感情を抱く一人の女性であることを再認識することになる。

「しんの」は、この複雑な関係において成長の触媒としての機能を果たしている。あおいの彼への感情は、過去への決別と現在への受容を同時に促し、三人それが新たな関係性を築いていく道筋を示したのである。

3) 複雑な思いとの向き合いと「しんの」の緩衝的機能

あおいが「しんの」に惹かれることで生じる複雑な思いは、表面化しにくい微細な心理的葛藤として現れている。

まず、あおいは自分がしんのに恋心を抱くことで、長年自分を支え続けてくれたあかねに対して何となく申し訳ないような、説明しがたい複雑な感情を抱く。これは、あかねの元恋人への淡い憧れを抱くことへの罪悪感に近い後ろめたさのようなものである。

同時に、幼い頃に慎之介を心理的に排除してしまったことへの漠然とした思いも心の奥底に存在している。両親を失った直後、あおいは生存のためにあかねとの二者関係を選択し、慎之介を含む複雑な三角関係から逃避した。その時の選択について、今になって何かもやもやとした感情が湧き上がってくるのである。

さらに、あおいは現在の安全で安定した関係性に変化が生じることへの漠然とした不安も感じている。これまで築き上げてきたあかねとの信頼関係が、自分の新しい感情によって

何か微妙に変わってしまうのではないかという、言葉にしがたい心配があるのである。

しかし、だからこそ「しんの」という存在が心理学的に重要な意味を持つのである。もしあおいが現実の慎之介に直接恋心を抱いてしまえば、これらの微細な感情は強烈な葛藤として表面化し、あおいの心を深く苦しめることになったであろう。

「しんの」は、このような直接的な葛藤を回避する巧妙な心理的緩衝装置として機能している。13年前の人物であるため時間的距離による安全性が確保され、「過去への憧れ」という形で新しい感情を安全に体験することが可能となる。あおいにとって「しんの」は、抑圧されていた三角関係の感情を段階的に処理するための心理的な訓練場のような役割を果たしているのである。

この安全な環境で複雑な感情と向き合うことで、あおいは最終的に現実の関係性を再構築する準備を整えていく。「しんの」への感情は、真の心理的成熟に向けた必要不可欠な通過点として位置づけられているのである。

しかし、この罪悪感こそが健全な分離・個体化には不可欠な要素である。

そのようにして帰郷した慎之介、ならびに「しんの」との出会いは、あおいとあかねの抑圧されていた感情を再び掘り起こすことになる。しかし、大人になった慎之介自身もまた様々なジレンマを抱えており、あの時に失ったものへの思いを整理できずにいるように感じられる。